

2015/12-2016/5の間、私は留学先のフィンランドのヘルシンキに住んでいました。

海外で暮らすのは初めてのことでした。

見たことがない文化もたくさんあったけれど、普段は気に留めなかった天気や自然が新鮮に感じられました。

芯から冷える寒い冬をこえて、やっと暖かくなった5月

青と白の花と、のびのびと飛んでゆくカモメ、からりとした風と澄み切った空

春を全身で感じた日を今でも覚えています。

エントランスの絵



フィンランドでは5月1日に「Vappu(ヴァップ)」と呼ばれる祝日があります。この日は春の訪れをお祝いする日で、国民は白い学生帽を被って、街を訪れ、ピクニックをしたりと賑わいます。帽子はフィンランドの高校を卒業した時にもらえる、国民にとって誇りのあるものだそうです。

私はこの時に、初めてヘルシンキでたくさんの人を見ました。街を走るトラムはぎゅうぎゅうで、どこも混雑していました。集まった人々はみんな楽しそうで、そのわいわいとした空気に勢いに圧倒されたけれど、私も彼らと一緒に「春が来たんだなあ」と実感しました。

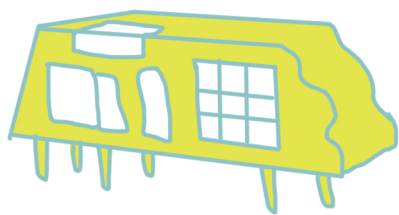
ランチプレートの絵 (11/2.11のみ)



ヘルシンキの港から、フェリーで15分ほど乗船すると、世界遺産である「スオメンリンナの要塞」に到着します。島全体が文化遺産となっており、美術館や教会があり、今も人々が暮らしています。

初めてこの島に行ったのは1月の下旬でした。凍った分厚い氷の塊が、海の表面を覆っていて、どうやって船は進むだろうと、乗船前は不思議に思いました。実際に乗船すると、ばきばきと氷をのけて、強気に船は進みました。デッキで見ていて、迫力を間近に感じました。海風はすごく寒かったです。春を思い出すと同時に、冬の寒さも思い出します。

絵の家具 (11/7-11/11)



暖かくなると、街中も緑色に色づきます。日が長くなり、夜の5時ごろになると仕事を終えた人が、街の公園でピクニックをしている光景も見かけます。学校が終わった後に、芝生の上でご飯を食べて帰る生活は、穏やかで、ゆったりとしていて、この生活を日本に持って帰りたかったです。

生活と自然の結びつきを描きたいと思い、家具に陶器で絵を描きました。引き出しには町並み、引き戸には人々と草木、棚の裏には葉と花の間を飛び回る鳥達があります。

高井碧

東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程 在籍

- 2016 フィンランド アアルト大学交換留学
- 2017 多摩美術大学美術学部生産デザイン学科プロダクト専攻卒業
- 2019 展覧会「SUTTEN(素展)-それってデザイン？」
- 展覧会「藝大×子ども展 vol.1 森の宝物をさがしに」
- 展示「コミテコルベール アワード 2019-令和：新しい時代-」
- 2020 作品設置 高遠バス停アートプロジェクト
- 展示「Brillia ART AWARD 2020」
- 2021 六甲ミーツアート 2021 作品設置
- 2022 合同展示「出会っちゃってシッポウ」

展示とコラボメニュー
是非ぜひ下さい

高井碧